

移民の想像力

——渡米言説と文学テキストのビジョン——

日比 嘉高

1 国民国家、物語、想像力

国民国家形成期における領土化と脱領土化のプロセスを論じるアプローチには、経済、政治、社会、思想などさまざまな角度がありうるが、これを修辞分析および想像力の観点から考える道筋もあるだろう。この論文は「帝国の時代」(ホブズボーム¹)という文脈において生じた人々の海外への移動——移民²——を、物語と想像力を糸口に読み解こうとするものだ。

ホミ・バーバは国民国家と植民地間の関係を物語の観点から批判的に再考する論文で次のように述べる。「このようなネイションの空間のさまざまな境界線のあいだで読解行為をおこなうことで、「国民」という概念が多重化したナラティブの言説のなかにどのように現れ出でるものなのかということが理解可能となる。国民とは、たんなる歴史的事象でも愛国的な政治体の一部でもない。かれらは社会的指向という複雑な修辞的戦略として存在しているのだ³。この「散種するネイション」という論考で彼が示したのは、「ネイションを想像の共同体として捉える同質で水平な理解に疑問を唱える」(p.61)ということだった。ネイションを均質なものと想像させる動力を、バーバはエクリチュールやメタファーの修辞的な力の側面から捉え、そしてこの平滑化し固定化する力を、余白margin、隙間in-between、リミナリティliminality、在地性locality、時間の多重化doubleness、行為遂行的performative、などの概念を駆使しながら脱構築していった。ネイションの求める均質な空間・時間の余白や隙間に、移動やマイノリティの言説などといったパフォーマンスな言葉・行為が両義的な意味を持って立ち上がる。そこに抵抗の契機を見ようとしたのである。

国民国家が必要とし同時にその境界領域に放逐した移民という存在にまつわる言説を、物語の修辞的分析はどのように扱おうのか。バーバの議論は一つの道筋を示してくれるだろう。

もう一つ、次は想像力にまつわる議論を参照しておこう。B・アンダーソンは国民国家形成に際する想像力の重要性を説いた⁴。では想像力は、国民国家の内部的「領土」と「辺境」「飛び地」とをいかにしてつなぐのだろうか。この問題を考えるときに示唆的なのが、アルジュン・アパデュライの『さまよえる近代——グローバル化の文化研究——』(平凡社、2004年6月)の考察だろう。彼は

1

E・J・ホブズボーム『帝国の時代1875-1914』(みすず書房、1は1993年1月、2は1998年12月)、とくに第三章、第六章を参照。

2

近代日本において海外へ移動し居住した人々またその行為を、「移民」と呼ぶか「殖民(植民)」と呼ぶかについては、同時代的にも用語の混乱があり、また研究史上でも議論がある。明治期の渡米言説の分析を行う本論文ではこの問題には踏み込まず、出稼ぎ、移民、殖民(植民)すべてを包括する広い意味で「移民」という言葉を用いることとする。

3

ホミ・K・バーバ「散種するネイション——時間、ナラティブ、そして近代ネイションの余白——」(『ナラティブの権利——戸惑いの生へ向けて——』みすず書房、2009年8月)、p.64。

4

B・アンダーソン『定本 想像の共同体——ナショナルイズムの起源と流行——』(書籍工房早山、2007年7月)。

「電子メディア化と大規模な移動が現在の世界を特徴づけ」るあり方を、「想像力の作動を駆り立てる（そしてときには強制する）力として」捉えた（p.21）。そして「マスメディア化されたイベントと移動するオーディエンスのこうした流動的で予測不可能な関係」の中から立ち上がる想像力の作動は、「純粹に解放的なわけでも完全に規律的なわけでもなく、「個人と集団とが自らの近代的な実践にグローバルなものを取り込んでいこうとする係争（contestation）の空間」として理解されねばならない、と主張した（pp.21-22）。

もちろん、このアパデュライの議論は、現代のトランスナショナルなメディア状況と流動化した人的移動をとらえようとしているものだ。だが、この想像力にまつわる問題構成は、その少し前の時代、すなわち本論文が焦点を当てようとする20世初頭においても十分な示唆をもたらす。速度や規模こそ違え、「帝国の時代」においても、やはり多くの人々が国境を越え、また大量の活字メディアが複数の国家の間を環流していた。想像力は、ではそこでいかなる役割を果たしたのか。人のアイデンティティ形成や振る舞いにどのような影響を与えるのか。領土的な思考と脱領土的な思考の葛藤の場に人の想像はいかにして参与し、メディアの越境的広がりとはどのような関係にあるのか。

物語と想像力の重要性を論じる際に私が重視したいのは、「帝国の時代は、経済的・政治的現象であるばかりでなく、文化的現象でもあった」と述べたホブズボームの指摘である（前掲書、p.107）。送出入口や地域、送金額や移民法などという移民史の具体的な個々の事実については、たしかに物語と想像力の分析が寄与できる点は少ない。しかし、移民は帝国の政治的、経済的構成要素であったと同時に、文化的要素でもあった。それゆえ、移民のもつ「象徴的な意味」（同、p.115）を考える必要が出てくる。たとえば、移民にまつわる政治的経済的言説は、しばしば移民というものが保持していた文化的記号性を流用していたはずだ。

移民にまつわる想像力の分析は、これまでほとんどなされてこなかったといつてよい。後述するように、渡米奨励の言説を分析する研究が「アメリカ」のイメージの検討を行い、そこで付随的に明らかになっているにとどまる。

本論文はこの問題に取り組むに際し、移民史研究においてはあまり用いられることのなかった文学テキストという資料体を扱う。これにより、想像力の展開がより詳細に拾い上げられると同時に、従来の視座においては渡米に関する言説の範疇に入れられてこなかった資料や、〈移民〉としては捉えがたかった人々——渡米希望者や渡米断念者、帰国者——の姿までもが検討可能となるだろう。

2 アメリカへ——

中学を中退したものの職もないまま、岩手県浜民村で病後を養っていた石川啄木は、1904年1月、米国にいる野口米次郎に宛てて長文の書簡を送った。啄木は野口の第三詩集『From the Eastern Sea』を読んで感激し、同年の1月1日にはこれを論じる評論「詩壇一則」を『岩手日報』に掲載していた。野口への手紙はその余勢を駆って書いたものらしく、次のようにうたっていた。

あ、然し、私の胸にはまた新しい病が起りました。外でもない、それは渡米熱と申す、前のよりも重い強い、呵責の様な希望です。⁵

この頃の啄木は「渡米熱」に取り憑かれており⁶、他にも「生〔啄木〕は本年の秋か来春は太平洋の彼方、ロツキイの山走る国へまらんと存ずる故」云々（同年4月15日付小沢恒一宛、p.52）などという手紙を友人に書き送っていた。

ほとんど同時期にアメリカを目指した青年の姿を、次は文字作品の中から見ておこう。

つれなき
無情い運命も、今は丑松の方へ向いて、^{すこ}微笑つて見せるやうに成つた。
あの飯山病院から追はれ、鷹匠町の宿からも追はれた大日向が——実
は、放逐の^{はつかしめ}恥辱が非常な奮発心を起させた動機と成つて——^{アメリカ}亜米利加
の『テキサス』で農業に従事しようといふ新しい計画は、意外にも市村
弁護士の口を通して、丑松の耳に^{のぞみ さいや}希望を囁いた。⁷

島崎藤村「破戒」の結末近くの場面である。主人公・瀬川丑松は、被差別部落出身というみずからの出自を生徒たちの前に告白したのち、勤め先の小学校へ進退伺いを出した。その彼のもとへ降って湧いたように訪れたのが、上記のテキサス行きの話であった。

予備知識なしに読めば、突拍子もなく思われるこの「テキサス」の一幕だが、しかし小説には注意深く当時の社会的文脈への通路がうめこまれている⁸。テキサスにあるという「日本村」、そこへ向かう人の流れ、彼らの出自、そして動機付け——心懸け次第では随分勉強することもできる——までも示されている。「破戒」は、日本からアメリカへ渡った人々の経路をたしかに書き込んでいた。

「渡米熱」——20世紀の初頭、明治の人々を太平洋の対岸へと駆り立てた熱病を指す言葉である。人々はなぜこの時期にアメリカを目指したのだろうか。彼らが思い描いたアメリカとはどのようなものだったのだろうか。

出稼ぎ、留学、商業、視察そのほかさまざまな形で米国へと渡った人々の流れについては、社会学、歴史学、地理学などの領域で、すでに数多くの研究が

5

引用は『啄木全集』（第七巻、筑摩書房、1968年4月）、p.40。以下、書簡の引用は同じ。なお野口の『From the Eastern Sea』は1906年10月に翻刻版が富山房より刊行されていた。

6

石川啄木の渡米熱に関しては、田口道昭「啄木「時代閉塞の現状」まで——渡米熱と北海道体験——」（『国際啄木学会研究年報』2002年3月）、相沢源七『啄木と渡米志向』宝文堂、1987年5月）、木股知史「立志と詩のアメリカ」（『石川啄木・一九〇九年』富岡書房、1984年12月）を参照した。

7

島崎藤村「破戒」（自費刊行、1906年3月）、武拾貳章（五）。引用は『藤村全集』（第二巻、筑摩書房、1973年3月）による。

8

「破戒」と移民論については高栄蘭「「テキサス」をめぐる言説圏——島崎藤村『破戒』と膨張論の系譜——」（『ディスクールの帝国——明治三〇年代の文化研究——』新曜社、2000年4月）、川端俊英『『破戒』の読み方』（文理閣、1993年10月）、同『『破戒』のと人権』（文理閣、2003年3月）

9

R・ウィルソン、B・ホソカワ『ジャパニーズ・アメリカン』(有斐閣、1982年6月)、p.25。

10

木村健二「明治期日本人の海外進出と移民・居留政策(1)」(『商経論集』早稲田大学、1978年9月)、「同(2・完)」(同、1979年1月)。

11

たとえば前掲木村健二論のほか、児玉正昭『日本移民史研究序説』(淡水社、1992年2月)など。

重ねられてきている。米国向けの旅券の発給数からその渡航者の数をみれば、1880年代には最大でも700名超だったものが、日清戦争前あたりから2000人を前後、1900年のピーク時には10,501人を数える。その直後に労働移民が禁止されて激減するものの、学生・商人の枠を利用しての渡航が増加を始め、日露戦後に二度目のピークを迎えて10,000人に迫る数となる⁹。

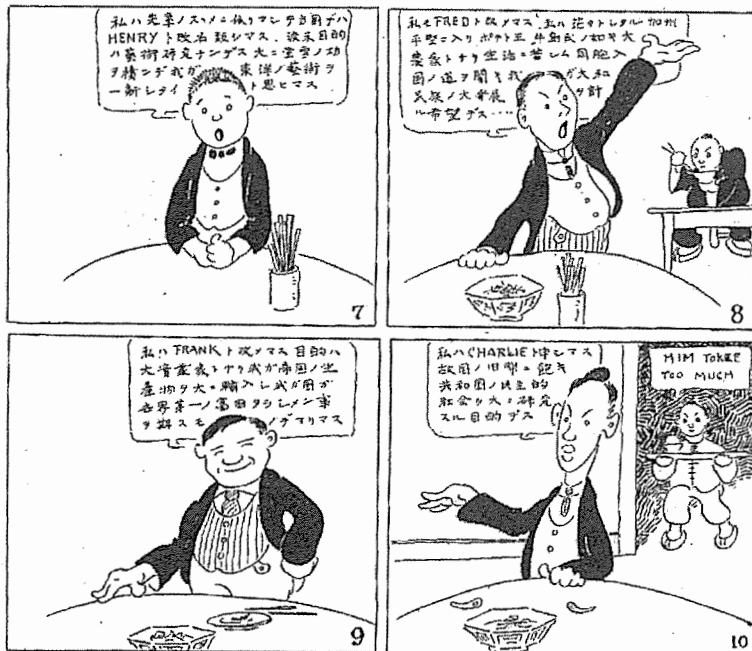
これは米国のみをめざした人の流れというよりは、日清戦後に日本政府が積極的にその国民を海外へと送り出し、国内問題に対処すると同時に国外での影響力を強めようとしていた、より大きな流れの一部と捉えた方がよい¹⁰。1908年の日米紳士協約によって米国への門戸が急激に狭くなったあと、人々は満洲や朝鮮、南米へとその流れを変えたことからそれは明らかである。移動の原因については、松方デフレによる農農民の疲弊、就職難、日本一ハワイ間に結ばれた官約移民の契約、移民会社の叢生、欧米式農法の修得、外貨獲得、もともとの地域社会の特色(出稼ぎの多い土地柄、など)、地縁・血縁による勧誘、人口問題など、多くの先行研究が考察を重ねている¹¹。だがこれらの社会的背景についての説明は、米国への移民送出の動因究明のためには不可欠なものではあるが、なお充分ではないように思われる。

人は、経済状況の不如意や、周囲の状況のみで自らの振る舞いを決めることはない。必ず、もしそのアクションを起こしたらどうなるか、という推測と検討が行われる。そしてその検証には想像力が介在する。アメリカとはどのようなところか、どのような人々が住み、どのような風俗をもつ国なのか。そこで自分に近い立場の人々はどのように暮らしており、どのような成果を自分は期待できるのか。むろん、そうした予想や逡巡がどの程度その人の行為を規定するか

には強弱があろうが、多かれ少なかれこのような未来図を描画する作業なしには、人々の行為はなされない。渡米に際して人々が抱いたであろうビジョンを考察するためには、人々を誘った言葉の分析が必須である。それは渡米熱の「熱」の部分を解明しようとする作業といってもよい。

人は社会的条件だけでは動かないし、ときにその条件や動機が曖昧な場合ですら、大きな行動を起こすこともある。ヘンリー・木山義喬の『漫画四人書生』(木山義喬画室、1931年1月)の冒頭の一話には、サンフランシスコに上陸した書生たちがその渡米の抱負を口々に述べる場面がある。時は

図1
ヘンリー・木山義喬『漫画四人書生』p.9より



1906年のサンフランシスコ大震災より前。芸術研究、農業、商業と三人が抱負を述べたあと、四人目のCharlieは「故国ノ旧弊ニ飽キ共和国ノ民主的社會ヲ大ニ研究スル目的デス」(p.9)と胸を張って、だが曖昧な目的を掲げる(図1)。私はこのCharlieの言葉を、曖昧であるがゆえにリアリティがないとは考えない。彼の動機は、この後検討する青年向けの渡米奨励言説の口真似に見える。渡米案内本や渡米物語で想像力を膨らませ、その勢いで米国へ来てしまった若者の姿を、木山は一つの類型として描いて見せているように思われる。

この論文は、明治の人々が太平洋を越えてアメリカを目指した時代を扱い、米国への移民がどのような言説の配置のなかで語られたのかを考察する。具体的には、アメリカへ人々を誘った言葉——以後「渡米言説」と呼ぶ——とその周囲にあった社会的動向を整理したのち、それらと文学テキストによる渡米物語との節合のあり方を考えていく。

3 誘う言葉たち

3.1 渡米案内書の世界

まずは人々を渡米へと誘った渡米案内書の検討から行おう。立川健治の一連の研究が明らかにしたように、渡米の利益は福沢諭吉などによってすでに明治の10年代から説かれていたが、日清戦争後渡米希望者が増加するにつれ、彼らに向けた渡米マニュアルの類が続々と出版されはじめる¹²。今井輝子は1885年前後に数種類の渡米案内書が刊行された後いったん姿を消し、1901年以降再び渡米熱のうねりを受けて次々と出版されはじめることを指摘する¹³。今井が示す渡米本のリストは1901年から1911年までの10年間で40種類を数える。もちろんこれは重版を含まない数字であり、この他に日本力行会、渡米協会、尚米同志会、東京交誼社などの渡米支援団体による雑誌や会報の類も多く出版されていた(今井前掲論、pp.320-321)。(図2)

こうした20世紀初頭の渡米案内記を奨励する書物、雑誌は、人々に何を訴えていたのだろうか。渡米協会を主催し、渡米案内本の刊行や講演会など、この時期積極的に奨励活動を行っていた片山潜の言葉を聞いてみよう。

渡米は現今國民多数の耳に最も強く響く所の声なり、渡米は國民中多数の青年の希望する所なり、是れ渡米熱に浮かされたる為めのみならず、之が原因は確乎たる事實に基づけるなり[……]何故に若く渡米希望者多きか是れ渡米の利益なるに依るなり、我が同胞が北米に行き往々其目的を達し得たるにあり¹⁴

12

立川健治「明治後半期の渡米熱——アメリカの流行——」(『史林』1986年5月)、同「福沢諭吉の渡米奨励論——福沢の交通、アメリカの原光景を中心として——」(『富山大学教養部紀要』人文・社会科学篇、1990年2月)、同「明治前半期の渡米熱——『時事新報』——」(『富山大学教養部紀要』人文・社会科学篇、1991年2月)。また女性向けの言説を検討した研究として宮本なつき「明治の渡米熱と女性たちの「亜米利加」像——渡米出版物から見た日本人移民女性史の一考察——」(『移民研究年報』2005年3月)がある。ほかAlan Moriyama「TO-BEI ANNAI: AN Introduction to Emigration Guides to America」(『エコノミア』1987年9月)も。

13

今井輝子「明治期における渡米熱と渡米案内書および渡米雑誌」(『津田塾大学紀要』1984年3月)、また今井輝子『外国人をめぐる社会史——近代アメリカと日本人移民——』(雄山閣出版、1995年7月)、第二章も参照。

14

片山潜『渡米の秘訣』(渡米協会、1907年刊か)、p.4。



図2 「渡米雑誌」1905年4月号の表紙

片山は、渡米熱が瀰漫している状況を示しながら、修学、技芸修得、蓄財、ほとんどあらゆる種類の希望者にとってのユートピアとして、アメリカを想像させている。「人生の目的は北米に於て達し得ざる者なきが如し」(p.5)というわけである。

渡米案内書は、こうした楽観的なビジョンを示しながら、一方でではどのように渡米するのかというマニュアルも提示した。吉村大次郎著の二種類の案内書から、労働者向けと青年向けのバージョンを見てみよう。労働者向けの『渡米成業の手引』(岡島書店、1903年2月)は「汎論」として「在米日本人の実況」を商業、農業など各分野にわたって概観したのち、「農業者の渡米」「職工の渡米」「芸術家〔医師、教育家、宗教家、政治家を指している〕の渡米」「銀行及生命保険会社出店の利」「労働者の渡米」「芸人の渡米」「婦人の渡米」などを並べ、最後に「在米成功者よりの近信」や見聞記を載せている。それぞれ職種に応じ具体的な情報に富んだ構成である。これに対し青年向けの『最近視察 青年之渡米 苦学者の天国』(中庸堂書店、1902年11月)では、まず「我が国青年雄飛の必要」「海外雄飛の必要」という理屈から入っている。これは中学卒業生の就職難を指摘し「貧生の運命」をちらつかせながら、「島国根性の脱却」「智識見聞の開発」「気宇の拡大」「真正なる愛国心の奮起」と精神的に奮い立たせ、かつ「米国富源の潤沢」「苦学青年の天国」というように実利をも示してみせるものだ。この後、渡航費や旅券、航路など丁寧な教示があり、もっとも一般的な学生の就労法であったスクールボーイ——一般家庭に住み込んで家事労働をしながら、日中は学校へ通う——の解説と各種学校の案内が続く。最後に「在米青年に対する誘惑及び其の墮落」についての注意喚起も附されており、なかなか興味深い。

3.2 移民論と膨張主義の言説

吉村による後者の書物にあった「海外雄飛」をうったえる言葉は、国家の膨張主義の言説を想起させずにはおかない。実際、海外における個人的な成功と日本帝国あるいは大和民族の対外的な発展とを重ねる言葉は、渡米言説の常套的パターンの一つだった。

だが論を進める前に、この構図は、実は見かけほど単純ではないことに注意を払っておくべきである。正田健一郎が指摘するように、「移民をめぐる論と政策と事実〔現実の人の移動〕」との間には相互作用と差異とがある¹⁵。明治前期における政治家の植民地経営意識の低さを指摘する研究もあるように¹⁶、移民論、移民政策、実際の移民たちの動向、そして渡米奨励の言説はそれぞれ単純に短絡することはできない。明治期の海外発展の言説としては、徳富蘇峰の大日本膨張論をはじめ、南方を目指す志賀重昂、竹越与三郎らの南進論、北方に重きをおく小村寿太郎、後藤新太郎らの北進論(満韓集中論)がよく知られるが、現実には、明治の中後期においては「南」「北」どちらでもない米国が最も人気

15

正田健一郎「明治期における海外移民に対する態度の変遷について」(『早稲田政治経済学雑誌』1989年1月)、p.2。ただし正田はこの相互作用について踏み込んで分析をしているわけではない。

16

福島信吾「明治期における植民主義の形成」(『思想』1967年1月)。

のある海外渡航先の一つであった¹⁷。人の動きと膨張主義的移民論の言葉は必ずしも一致しない、にもかかわらず、渡米言説の枠組みと膨張主義的移民論とは通底する部分があった、と言うべきなのである。なぜだろうか。

それは、渡米奨励の“思想”の言葉の大半が、主にいまだ世に出る前の書生達に向けて語られていたからであり、外交や経済、人口制御などを論じる専門的な議論ではなく、冒険的な企図に際して精神を鼓舞することが第一の目的である“掛け声”に近いものだったからである¹⁸。

たとえば当時の代表的な総合誌『太陽』に掲載された坪谷善四郎「国民的膨張＝移民」(1901年12月)を見てみよう。

国民の膨張に二種あり。一は征服的膨張にして、二は国民的膨張なり。〔…〕国民的膨張は然らず、軍隊の力を仮らず、英雄の輩出を望まず、国民の力を以て漸次に国外に膨張す。其の短期なるを出稼と云ひ、長期なるを移住と云ふ。〔…〕顧みて日本国民を見るに、繁殖力に富むこと世界無比なり。近く十年間の統計に由れば、年々約五十万を増加す。〔…〕其の人口をして空しく本国内に局促たらしむるときは、久しからずして食料の欠乏を感ずるに至らんとす。是れ吾が同胞は自然の必要に迫られて漸やく国外に膨張せざる可らざる所以にして、実に日本国民は先天的に移住の資格を具備す。

坪谷の議論は、この時期の移民論の典型的な骨組みを示している。「帝国の時代」にふさわしく、社会進化論的な列強間の競争の構図を背景におき、その中における日本の有望性を説く。典型的なのは軍事的侵出(「征服的膨張」)をとらず、“平和的”侵出(「国民的膨張」)をとるという論の構えである。後者がすなわち移民による国民＝国家の膨張である。その根拠となるのは「繁殖力」の旺盛という日本民族の生物的優位性である。ただしその「繁殖力」は国内における人口の過多をももたらしており、その解決のためにも人口の海外移転が必要だ、という論法になる。

そして論がこの範囲にとどまる限り、移民先はどこであってもかまわないことが重要である。明治中頃までの移民論の大半は、この基本的な構造は同一のまま、対象たる移民地／植民地をバリエーションとして変えているだけというように把握することができる、と私は考える。

3.3 成功論

渡米熱はまた明治中期の成功ブームと密接に関連していた。今井輝子がすでに指摘するように、実際「当時の成功ブームを反映して創刊された『成功』誌も、〔…〕次々と渡米関係記事を掲載」していた¹⁹。竹内洋『日本人の出世観』(学文社、1978年1月)は、「成功」がブームとなったのは、「戦争〔日清〕の勝利によ

17

1900年時点の在留邦人数で確認しても、米本土の在留者は、台湾(37954人)に匹敵する32493人である。朝鮮15829人、関東州と満洲と中国で3243人、ちなみに北海道を除く最大数はハワイの57486人であった。前掲木村「明治期日本人の海外進出と移民・居留民政策(1)」による。また広瀬玲子が明らかにしたようにたとえば国粋主義者達の移民論は、実際には「北」あるいは「南」のどちらかを択一的に選んでいるわけではなく、その両者にまたがったり北海道やハワイ、南米を視野に入れたりしていた(広瀬玲子「国粋主義者の移民論・植民論覚え書き」『歴史評論』1993年1月)。徳富蘇峰については澤田次郎「徳富蘇峰の大日本膨張論とアメリカ—明治20年代を中心に—」(『同志社アメリカ研究』2005年3月)、南進論については矢野龍「南進」の系譜——日本の南洋史観——(千倉書房、2009年5月)、日露戦後の移民論については小野一郎「日本帝国主義と移民論——日露戦後の移民論——」(小野一郎ほか編『世界経済と帝国主義』有斐閣、1973年5月)。

18

それぞれの渡米案内書に依りて、思想的・イデオロギー的な議論と実用的なマニュアルの記述との比率は異なるが、一般に労働者を対象とした記述においては具体的情報に力点が置かれ、学生などリテラシーの高い層に向けては思想的な移民論が大枠として説かれる場合が多い。

19

今井前掲論。また桑井輝子「日米両国の成功雑誌に関する一考察」(『アメリカ研究』1987年3月)も参照。

る大国意識や、新世紀の開幕によって生じた「新しい活動の天地は無限にひらけている」という観念上の機会拡大意識によるところが大きかった」(p.107)と述べている。

渡辺四郎『海外立身の手引』(雲梯舎、1902年3月)、田畑喜三郎『渡米者成功之友』(清水書店、1908年5月)など、「成功」「立身」の名を戴く渡米関連本もめずらしくない。ここでは平井嶺南の『立身成功案内』(文星社、1907年3月)を取り上げてみよう。同書は渡米に限らず、幅広く成功の道を示しているため、当時の「成功」の見取り図をうかがうにはよい資料になるだろう。平井はまず「成功の基礎」となる条件や心構えを論じた後、「有望職業案内」として「政治家」「法律家」「医師」「軍人」「農業家」「機械工業家」など30種の職種を挙げ、その次に「海外成功案内」として満洲、韓国、北米、南米の4方面を論じる。この後に46校(種)の「学校案内」が続き、最後が「自活苦学案内」で「活版職工」「人力車夫」「牛乳配達」「新聞配達」などが紹介され、この中に「在米の苦学生」という一項が立てられている。渡米ブームは、成功ブームの一部でもあったのである。

3.4 苦学

平井の見取り図の中にも位置を占めていたように、成功ブームの一隅に「苦学」があった。E・H・キンモンス『立身出世の社会史——サムライからサラリーマンへ——』(玉川大学出版部、1995年1月)は、成功ブームの牽引役ともなった雑誌『成功』を分析し、次のように指摘した。「伝記的人物の学生時代について論じる時には、『成功』はもっぱら学資を稼ぐために働くいわゆる「苦学生」をとりあげた。これは『成功』に限ったことではなかった。『成功』を含め他の雑誌も、苦学生への様々な手引き書の広告を掲載していた」(p.164)。

苦学生が成功を目指すバイパス・コースの一つとして、渡米があった。当時の苦学生向け書籍には渡米情報が載り、渡米書の多くにも苦学生向けの記述が存在していた²⁰。藤本西洲他『海外苦学案内』(博報堂、1904年4月)のようにタイトルにそれをうたうものもあった。雑誌『渡米』創刊号(1907年11月)に掲載された記事「苦学生の前途」は、次のように苦学生をとりまく状況を嘆きつつ、北米の魅力を力説していた。

数十万円の資金を有する大学にして一文の苦学生に資する者なきは吾人の遺憾とする所なり〔、〕我教育者が学府は資産家の子弟の占有すべき所なりと思意せるとせば吾人は我青年に奮つて渡米せよと絶叫せんと欲す、北米の学校は実に苦学生の為めに最も多くの同情と扶起を払へる所なり、今後の苦学生は大に決心する所なかる可からず (p.8)

以上、渡米案内書、移民論、成功論、苦学論と概観してきた。あらためて注

20

たとえば緒方流水『学生自活法』(金港堂、1903年1月)、島貫兵太夫編『最近渡米策』(日本力行会、1904年9月)、梅田又次郎『在米の苦学生及労働者』(実業之日本社、1907年1月)など。代替コースについてはキンモンス前掲書にも指摘がある(p.174)。

意したいのは、渡米奨励の言説がたんに渡米のマニュアルだけを示していたのではなかったという点である。もちろん、旅券の申請方法や船中の過ごし方、必要とされる物品や費用、また渡米後における生活の仕方——職の求め方、英会話、マナー、米国の風俗や日本人町のようななど、具体的な情報が満載されていたことはいうまでもない。だが立川が論じたように、渡米言説は実用的情報に加え、稼げて学べる国、自由の国、民主の国などというアメリカという国のイメージそのものを創り上げる機能をもっていた²¹。そしてその作業は、反射的に〈日本〉とはいかなる国か、〈大和民族〉のあるべき姿はどのようなものか、という自国・自民族についてのイメージ形成を伴っていたことも忘れてはならない。むろん、すべての移民およびそれを論じる言説が国家主義的、領土的なものばかりであったと主張しているのではない。移民は、経済資本や学歴資本の獲得を目指す個人的な企図でもありえたからである。だが、そうした個人的な営為も含め、人と物と情報とが太平洋上を激しく往来する時代が訪れていた。渡米言説は、個人的欲望を掻き立てる言葉から、国家と民族の未来を論じる言葉にいたるまで、さまざまな言説と節合しながら、日本と米国両者に関する知と想像の形成過程に参与していたのである。

4 渡米物語の想像力

この渡米言説とそれが編成していった渡米についての人々のイメージを利用しながら、想像力により強く訴えかける一群の物語が作りだされた²²。

そもそもこうした渡米についての文学的テキストは、紙面上でも、渡米推奨の論説や実用情報と隣接していた。たとえば雑誌『渡米』第一巻一号（1907年11月）、二号（同12月）、第二巻第一号（1908年1月）には「小説」欄があり、原霞外「立志小説 象牙撥」（第一巻一号、二号）、原霞外「立志小説 新世紀」が掲載されている。前者は「大陸貿易会社社長降旗毅一」の経歴談の体裁で、門付けの三味線弾きの子に生まれた彼の立身出世譚（未完のまま終了）。後者もやはり、桑港で一、二を争う邦字紙『新世紀』の社長「僕」の経歴談で、長野の山中に生まれ、東京へ遊学、民声新聞の新刊批評担当の記者になったところで第一回が終了している。両作とも〈立志〉〈出世〉〈実験談〉が鍵となっており、これはそのまま雑誌『渡米』がもっていた性格の一部だと言ってよい。

具体的なテキストの検討に入ろう。一つめは天涯帰客『立志冒険 北米無銭渡航』（大学館、1906年1月、図3）である²³。出郷して十年高等官試験の合格を目指して東京で苦学していた「僕」は、金こそが万能であると考えを改め、「寝て居て栄華の出来るだけの金」（p.6）として一万円の貯金を目標とする。それをかなえるために彼が思いついたのが米国への渡航であった。苦心のあげくに三千円の貯金を果たすが、父の危篤の知らせで一旦帰国、再度結末で「米大

21

前掲、立川「明治後半期の渡米熱——アメリカの流行——」参照。

図3

天涯帰客『立志冒険 北米無銭渡航』表紙



22

関連して、〈殖民小説〉を考察した和田敦彦「〈立志小説〉の行方——「殖民世界」という読書空間——」（前掲『ディスクールの帝国』所収）がある。また和田に「〈立志小説〉と読書モード——辛苦という快楽——」（『日本文学』1999年2月）がある。

23

『立志冒険 北米無銭渡航』および後に検討する永井荷風「船室夜話」については、別稿（日比「船の文学——『あめりか物語』『船室夜話』——」『文学』2009年3月）で論じたことがあり、本論文と一部論旨が重複することをお断りする。

陸」をめざす。という筋立てである。もちろんこれは、同時代の「成功青年」の戯画である。前掲キンモンス『立身出世の社会史』(5章)は、立身出世の概念が政治的成功から経済的成功へと変容したことを指摘するが、「僕」の変節はおそらくそれをなぞって造形されている。

『立志冒険 北米無銭渡航』は米国案内の変異形でもあった。作品は「僕」が渡米を志し、渡航の算段をし、上陸し、働き、失敗し、そして大金を手にするまでのプロセスを描き出す。もちろん娯楽小説であるためこうした過程は省略も多く滑稽めかして書かれているが、渡航以後のアメリカ生活のようすは、明らかに稼働の経験者か経験者から詳しく体験談を聞いた者でなければ書けないディテールに富んでいる。サンフランシスコの邦人キリスト教団体のようす、桂庵における仕事の周旋、スクールボーイ、賭博、カナダでの漁業など、その記述は詳細で読者の想像力を充分にふくらませる。

そして注目したいのは、この小説のもつ「立志冒険」という角書きである。この言葉は渡米という海外渡航が成功のための一方法であったと同時に、それ自体冒険的な試みだったことを語っている。実際、この本の末尾には版元である大学館の類書の広告が掲載されているが²⁴、『世界武者修行』『魔島の奇跡』『モンゴリア妖怪村』などの海外冒険奇譚もの、そして『冒険小説 百難旅行』『無銭修学』『無銭旅行』『乞食旅行』『貧乏旅行』『奇女無銭旅行』などの貧乏旅行ものがずらりとならんでいる。渡米の想像力が冒険の想像力と交差していることが見て取れる。

しかも面白いのは、海外冒険もののすぐ横に寄り添うように〈貧乏旅行〉〈無銭旅行〉への想像力が存在していることである。この時代の苦学という実践には〈無銭旅行〉が織り込まれていた。苦学社発行の雑誌『苦学界』はその責務とする事業の中に「無銭旅行奨励」を数えており、実際「無銭旅行隊」を募って(第九号)、横浜方面へ遠征していた²⁵。久保任天に『世界無銭旅行』(成功雑誌社、1907年9月)という小説がある(図4)。その「第三回 渡米熱の昂進」には、主人公が次のような想像ふくらませる一節が描かれていた。「儲、其後は、渡米、冒険、実業、致富と言ふ様な事が、絶えず、自分の脳中を往来して、人知れず、思を砕きつゝあつた。[...] 亜米利加に押し渡り、商業を営んで巨万の富を造らむと、実際僕は、其通りに決心して居たのである」(p.19)。こうした娯楽読み物たちからは、冒険として生産・消費される渡米の姿が明らかに見て取れる。もちろんこれらは空想的だが、その想像力はシリアスな渡米言説と地続きだったのである。

二つめのテキストの検討に進もう。星野徳治『苦学独歩 異郷之客』(警醒社、1903年4月、日付は序による)は、一言ではそのジャンルを定めがたい書物である。この本の主要な部分は主人公「予」が仕事を変えながら米国太平洋岸を転々とする物語によって構成されている。ストーリーは、神戸の外国商館に働く「失意の人」であった「予」が奮起し、自営自活で学びうるかぎり学ぼう

24

筆者が参照したのは国会図書館所蔵の明治三十九年一月二八日発行の刊記をもつ本である。

25

「無銭旅行隊」の舉行目的は「隨時無銭旅行隊を編成して地方を旅行せしめ、以て精神と肉体をして艱難に堪ゆる練習をなさしむ」(『苦学界』の「事業」(第16号、1902年6月)による。なお『苦学界』には「桑港より」(15号)、「桑港だより」(17号)、「シアトルの学生会」(20号)などの米国便りも掲載されていた。



図4 久保任天『世界無銭旅行』表紙

と渡米、家内労働、ホテル清掃、鉄道工夫の通訳、コック、避暑の随行を遍歴し、最後はスクールボーイとして二年の業を終えるまでを描く。予は語り手であると同時に登場人物として物語内に登場し、会話も『 』でくり出されて直接示されるなど、文体も一人称小説の体裁に準じている。

ところが、本文部分の版面を見ると、メインとなる遍歴譚の上部に渡米や米国生活についての補足情報やアドバイスを書いた頭注が付いている。しかも、本の末尾には「附録 渡米案内」というページが20ページ超にわたって附され、渡米希望者に情報を与えている²⁶。そしてタイトルが示すように、同書は苦学論の系譜もひく。序を寄せた松村介石（明治大正期のキリスト教系の著述・教育者）は、巻頭で「今や日本は土壤小にして人多く、蠢々擾々、到底苦学生の志を為すべき地にあらず、よろしく去て海外に行くべし」と煽っていた。

いったいなぜこのような奇妙なテキストが生み出されたのか。著者の星野徳治はその自序で次のように言っていた。

予が此著を為す、二個の動機あり、一は予が在米間の閱歴自ら以て奇とするに足るものありと信ずれば也、他は即ち是に依て我在米同胞の境遇を写して渡米志望者の参考に供せんと欲したれば也、文詞を飾れるは、予に文学の横好あれば也。

米国に住む日本人のようすを伝え、渡米志望者の参考とする。それだけであるならば、その他の実用的な書物と同様に、渡米案内書としてよりわかりやすい体裁が選べたはずである。しかし、著者はそうしなかった。その理由、すなわち「文詞を飾」った理由を、彼は自分に「文学の横好」があったからだと述べる。おそらく、この理由は不十分である。なぜなら、彼が一人称小説の体裁を選び取ったのは、彼のいう動機の一つめが関わっているからである。我ながら「奇とするに足る」経歴を、よりわかりやすくまとまった形で読者に伝えるには、小説の形がもっとも適していると彼は判断したはずなのである。

物語のもつ、情報のパッケージ化機能がここでの問題である。何時どのくらいの頻度でサンフランシスコ行きの船があるのか、米国までの郵便料金はどれくらいか、などという情報ならば、表として示す方がわかりよいだろう。米国に住む日系移民コミュニティに起こった出来事を整理するなら、年表がふさわしいだろう。だが、ある一人の人物が、自ら体験した個人的な経歴を、眼にした光景や受けた言葉や感情や記憶までも織り込みながら、できるだけ面白くかつわかりやすく他者に伝えようとするならば、物語以上の形式はこの時代存在しない。

人が太古から繰り返してきただろう物語行為、そしてそれを近代的な言語芸術として鍛え上げた小説という言語形態は、たんなる娯楽でも現実から遊離した絵空事でもない。それは、ある種の情報の一群をもっとも効率よく聞き手／

26

国会図書館の所蔵本では巻末に落丁があり、全何ページが判明しない。奥付も欠落している。

読み手に伝えるために選ばれる伝達的手段でもある。それは風景、他者と自己の発話、出来事の契機、その因果、世界の見え方、社会的な事件、内的な省察、記憶などを一連なりの言葉のうちに描出し、世界を再現してみせる。読者は、その言葉の連鎖から、登場する人物たちの見た風景、言葉、出来事、感情、思考などを受け取っていく。しかも、よくできた物語は読者の関心を強く引きつける力をもつ。読み進めながら感情を揺り動かされ、新しい知見を得てゆく喜びが、読者を長い長い言葉の連鎖の最後まで導いていく。そして読了した読者の脳裏には豊かな想像の世界が立ちあがっているだろう——。「文学の横好」の趣味をもっていたという『苦学独歩 異郷之客』の著者は、間違いなく物語の喜びを知っていたはずである。だからこそ、彼は渡米案内を目指すべき書物を小説のような形でまとめたのである。

こうした娯楽小説を、渡米ブームを当て込んだ消閑的商品として黙殺することは簡単である。しかしこれらの小説は、アメリカに渡るという行為に託した人々の想像力の形——空想と現実の混じり合った〈渡米〉のようすを生き生きと描き出している。そしてその想像力は、〈渡米〉にまつわる読者の知識を形成し、読者が移民となる^レときの計画やビジョン、予断に力を与えてもいたはずである。物語と想像力もまた、移民を創り出す力の一つだったのである。

5 裏面の物語

文学テキストという視座から渡米への想像力を考えると、これまでの移民送出についての研究では見えてこなかった領域がさらに見えてくる。それは、渡米の不安であり、渡米の失敗であり、そしてそもそも渡米しなかった者たちの姿である。

渡米言説に関する先行研究は、基本的に渡米の失敗については触れない。渡米言説は渡米を奨励することを目的としたものであるから、失敗を避けるための注意事項を述べることはあっても、失敗者の具体的な描出は当然行わない。したがって、それについての研究も、アメリカへ行くことの恐れや、行くことに失敗した者や、断念した者たちを論の射程に入れてはいない。だが、文学テキストという視座から出発すれば、これは変わってくる。

考えてみれば、実際に渡米した数万人の背後には、それに数倍数十倍する渡米希望者、あるいは希望しないまでも少しだけ関心を寄せていた者たちがいたはずである。そして彼らの大半は現実には渡米しなかったりできなかった者たちだ。「渡米熱」は、本来この範囲まで含めて考察されるべきだと私は考える。

移民を計画しながら断念した近代文学史上最も著名な作品は、内田魯庵の「くれの廿八日」²⁷だろう。この作品は米国移民ではなくメキシコへの移民事業を目指した起業家の話だが、海外への民族的膨張という国家的野心が、個人の

27

内田魯庵「くれの廿八日」(『新著月刊』1898年3月)、引用は『内田魯庵全集』(第九巻、ゆまに書房、1985年2月)による。西原大輔「内田魯庵『くれの廿八日』とメキシコ移民」(『比較文学研究』)は、作品の背景として榎本武揚の殖民協会の事業を見ている。これについては同全集九巻の野村喬「解説」も参照。

経済的成功および壮士の野心とない交ぜになって渦巻いていた時代の想像力の一端をよく示している。

[...]人種の膨張と社会の逼迫とで必要上再燃した殖民の競争が漸く激烈となるは既に数年に差迫つた二十世紀で、我々が未来の太平洋問題に処して平和の鑰を把持する盟主となるには北緯三十度以南の太平洋一帯の地に雄鎮を築くが第一の準備である。我々はヒューマニチイを宣伝し、能ふべくんば世界の軍備を撤回するを庶幾するが故に歴史上必然避くべからざる人種の衝突を救はんが為め縦令卵殻を以て巖石を砕くより難くとも此風雲に際会して平和の福音を伝へんとするので、恰もノアが天の未だ霖雨せざるに先だち明命を畏みて方舟^{アーク}を建造したと全じ心持で、此獸欲的競争の高調に乗じて無人の楽郷に新ユトーピヤを創開^{ひら}かんとするのである。即ち此無人の楽郷は……

『墨西哥……墨西哥』[...] (p.12)

世態を描写しつつ諷刺しようとした魯庵の他の〈社会小説〉と同様に、「くれの廿八日」の登場人物もまた少なからず語り手から冷やかな視線でながめられている。だが、戯画化はその人物や思想の特徴的な部分を巧みに捉え、誇張することによって、批評の俎上に載せる。主人公有川純之助の冒険的な殖民計画は、本論文でも確認したような当時の紋切り型的な移民・殖民言説の引用・反復として示されている。作品の冷めた眼差しは、この「壯図」(p.79)が計画され実行されるようすではなく、挫折を余儀なくされた後の場面から書き起こし、計画は断念されたまま結末を迎える。主人公は金満家の家へ養子に入ったのだが、メキシコ殖民の事業はついにその妻に理解されることはなく、彼はついに「自ら韜晦してお吉〔妻〕の幸福に殉じやうと決心」(p.97)するのである²⁸。

石川啄木「鳥影」²⁹には、中学を落第の結果退学し、米国行きを願うもののそれを果たすことのできない青年が登場する。岩手県の浪民村を舞台に展開するこの長篇小説の主筋は複数の男女の恋愛模様だが、その周囲に存在する副次的な登場人物の一人としてこの若者、昌作が配置されている。ほとんど点景的といつてよい程度にしか描写されない昌作だが、その造形はなかなか陰影に富んでいる。中学を中途退学した上に、周囲の者たちとなじめない偏向した性格の人物であると同時に、和歌を作り、東京からやってきた青年画家に心酔し芸術への関心も寄せる。ただしそうした趣味も中途半端なものにとどまり、本人もそれに自信もなければ本気になるようすもない。

何よりこの人物が注目に値するのは、中心的人物とはいえない位置づけであったにもかかわらず、この長篇を閉じる最後の場面が彼にまつわるエピソードで締めくくられているという点である。最終場面、昌作はポストに二通の手紙を投函する。彼は「米国に行くことも出来ず、明日発つて十里許りの山奥の

28

高橋修は、矢野龍溪の『浮城物語』(1890年)からの「〈海洋小説〉」の変容をたどる論考(『ジャンルと様式——日清戦争前後——』『日本近代文学』1994年5月)で、魯庵の「くれの廿八日」は「人物の〈内面〉に物語が中心化されている」と述べ、「明治四十年代的な小説」とのつながりを指摘した。

29

啄木「鳥影」は『東京毎日新聞』1908年11月1日～12月30日。引用は『啄木全集』(第三卷、筑摩書房、1967年7月)による。

30

上田博「『鳥影』——さまざまな女の悲哀——」(『啄木——小説の世界——』双文社出版、1980年9月)は、昌作の姿に「啄木自身のパロディ化」(p.108)を見ている。なお昌作は、当初登場したときは「南米」行きを夢見ていると別の人物たちによって噂されていた。結末で語り手はこれを「米国」とした。

31

「時代閉塞の現状」は生前未発表、1910年8月稿か。引用は『啄木全集』(第四巻、筑摩書房、1967年9月)、p.262による。／は原文改行。以下同。

32

真山青果「馬盗人」(『文章世界』1909年7月)。引用は『真山青果全集』(第十五巻、講談社、1976年3月)による。

或小学校の代用教員に赴任」(p.297)することになっていた。手紙は、その挨拶状だった。

勉学も、芸術も、恋愛も、なにごとにつけ中途半端な青年は、作品の最後でもやはりその渡米の夢を果たすことはできず、代用教員として「山奥」へと赴任する。自らも渡米熱に駆られ、しかしその夢を断念した経験を持つ啄木³⁰は、この末尾に何を託したのだろうか。

二年後、啄木は「時代閉塞の現状」を書く。この高名な評論で彼は次のように同時代を論難していた。「中途半端の教育は其人の一生を中途半端にする。〔…〕かくて日本には今「遊民」といふ不思議な階級が漸次其数を増しつつある。今やどんな僻村へ行つても三人か五人の中学卒業者がゐる。さうして彼等の事業は、実に、父兄の財産を食い減す事と無駄話をする事だけである。／我々青年を圍繞する空気は、今やもう少しも流動しなくなつた」³¹。昌作の閉塞感は、のちに啄木が明確に言語化する「時代閉塞」へとつながっていると考えてよいだろう。その閉塞感が、一部の青年たちを米国へと向かわせた。だが、実際に渡航できたのは、一握りだった。昌作の結末は、そうした青年たちのたどり着けなかった脱出口の形象化と読むべきだろう。

失敗に終わった米国生活への想像力もまた存在した。川上眉山「大さかづき」(『文芸倶楽部』1895年1月)は、船頭だった梅吉が北米へ出稼ぎに行き大金を儲けるが、帰ってみると父は死に、恋人は心を変えていたという物語だ。真山青果の「南小泉村」は仙台近郊の農村を描いた連作小説であるが、そのうちの「馬盗人」は、アメリカ帰りの青年文一を主人公とする³²。文一は、迎えの者たちを避けるように夜更けに帰郷した。三日ほど後、彼は視点人物である医師「僕」のところに「ロス・アンゼルス市立病院の施療処方箋」を携えて来訪する。彼は相当進行した性病を患い、視力を失いつつあった。

『皆に先方の話を聞かれるのが一番苦しいんです。僕のやうな墮落者は何も云ふ資格はありませんからな。』と薄皮な、血走りやすい顔を染めて恥らひながらも、聞かれば流石に矜^{はこり}を持つて彼の大陸の話に倦まなかつた。(p.62)

地方の旧藩士の家庭に育った青年は、仙台で活動していたらしいキリスト教会の宣教師の伝手で渡米した。「神学専攻」(p.64)がその目的だったという。しかし誠実なキリスト者だったであろう青年は南カリフォルニアで身を持ち崩し、性病を抱えて帰郷する。彼はそうした自分を恥じつつも、アメリカまで行ったことを誇りにしているようであり、その思い出を「僕」に語り、今も米国に住む友人と手紙のやりとりをする。しかし彼は、強く生きる意欲を失ってしまっているようでもある。病が進行し、次第に光を失っていく彼を心配し、「僕」が「病院へでも入つて、根治的の治療を受けたら好からう」(p.65)と勧めても、彼は

応じようとしなない。

羞恥と失意を抱えて村に帰り、光をも失いつつある文一の姿は、成功や学歴を求めて渡米する青年たちのちょうど裏側に位置するかのようである。自然主義文学の代表的作品の一つとされる「南小泉村」は、厳しい農村の生活を突き放したようなりリズムで描き、世評を得た。青果のテキストは、その東北の農村の地平に、アメリカの影がひそかに差し込んでいたようすを描きとる。失意の青年の病んだ身体が、そのアメリカを媒介している。「馬盗人」において、〈南小泉村〉というローカルな場は、突如として、キリスト教の国際的布教ネットワークによる海外移民と、米国の黒人女性（文一の買った娼婦である）に対する性的搾取と、独身男性移民たちの売春の慣習と、それによる性病の拡散と、米国式医療の日本への導入、などという「帝国の時代」におけるグローバルおよびローカルな状況が落ち合う「係争の空間」（アパデュライ前掲書、p.22）へと変貌する。

住み慣れた故郷を去り、周囲からの重い期待を受け、少なからぬ者が金銭的な援助や借財さえ背負い、未知の異国へと赴く。渡米という行為が、だれにとっても強い不安を伴うものであったろうことは確実である。本論を閉じるにあたり、この不安と希望の入り交じったようすを描く作品を検討しよう。永井荷風の「船室夜話」である。

横浜を出航して10日あまりたつシアトル行きの船中で、三人の乗客達が渡米の経緯と抱負を語る。いずれも、なんらかの不如意を国内で抱え、失地を回復するために米国へと旅だった人々であった。しかし、作品は彼らの姿を希望に満ちたものとしては描かない。船窓の外には「暴風雨」が吹き荒れており、その嵐はそのまま作中人物たちを襲う人生の困難と重ねて表現されている。

この小説は三人のうちの一人が語り手となっているのだが、残る二人の談話を聞いた彼は作品（初出形）の末尾において次のような感慨に打たれる。

一人は己れの才能と経歴を余りに多く思過ぎたために、望むが如き愉快を生れ故郷の地に得る事の出来なかつた独身の才子、一人は切なる妻の愛情を振捨てて学問と肩書とを買ひに行く若い夫。…何の事はない私は強く刺撃された感興を以て、二個の長い小説をば一度に読了した様な心持である。然し、其れは何れも未完のもので有らねば成らぬ。とすれば、彼等が新開の世界に於ける、そして又帰国してからの後篇は如何に成り行くものであらうか。

運命の神——不可知の大作者！願くは此等の活小説の結末をば、聽て目出度い大団円のもので有らしむる様に……！

別稿（注23）で詳細に論じたが、実はこの語り手もまた「未完の」人生航路を歩む一人の渡米者であったと考えられる。想像力は、必ずしもポジティブな向

きに働くわけではない。結末のわからない物語のような自らの人生の行く末を、「運命の神——不可知の大作者」に祈った渡航者は多かったに違いない。

引用において、移民たちの人生が「小説」に喩えられていることに注目しよう。シアトルに向かう船は、つまり三人の移民を乗せ、そして三冊の小説を乗せていたわけである。物語は、互いに読まれあいながら、彼らの過去と今と未来とをつなぎ、残してきた故国と暴風雨に囲まれた船中と未知なる米国とを想像力によって結びつける。永井荷風の「船中夜話」は、移民と小説と想像力が海を越えるようすを描いた物語であると言いうるかもしれない。

そして、「船中夜話」という作品それ自体も、海を越えて運ばれたことを最後に書き留めておくべきだろう。初出形において、著者署名の「永井荷風」の右肩には「在米」の二文字があった。末尾にも、「(米国タコマの旅舎にて三十六年十一月稿)」とあった。つまり原稿は在米の作者によって生み出された。そして作品は翌1904年4月の日本の国内誌『文芸倶楽部』に掲載され、のち彼の短篇集『あめりか物語』(博文館、1908年8月)の巻頭を飾った。この雑誌も『あめりか物語』も、ほぼ間違いなく、間を置かず米国へ輸出されていたと推定できる³³。作品それ自体も、めまぐるしく海を越えていたのだ。あらためて確認すれば、こうした人と書物の越境のありさまは、アメリカと日本をつないだ渡米本とその著者たちにおいても、同じであったはずだ。

人が海を越え、書物が海を越える時代の見取り図は、さほど楽観的なものではない。横浜を出航した三人も、それぞれに重い過去を、日本という国を引きずっていた。そのくびきからはそうたやすく逃れられるものではない。ただし、彼らの運命が、洋上に漂い出たときから不確定な要素を強めたのは確かだろう。彼らの人生＝小説は「未完」のままだった。

「船室夜話」のオープンエンドの結末は、物語と想像力が「国」や「運命」の境域を越えて漂流しはじめる「帝国の時代」における脱領土化の一コマを描いている、といっは読み過ぎだろうか。